

H A G

萩

題字は吉田松陰筆跡

WINTER ISSUE 2017

82



萩大賞

こくさいき そう
《黒彩器 一相一》

しづや えいいち
渋谷英一 2016年

HAGI URAGAMI MUSEUM

現在形の陶芸 萩大賞展Ⅳ 萩大賞受賞者 渋谷英一さんインタビュー



萩大賞をみごと受賞された山口県萩市の陶芸家、渋谷英一さん〔37〕に受賞作品《黒彩器-相-》の制作と今後の抱負についてお話を伺いました。聞き手は、石崎泰之（当館学芸専門監）です。

一萩大賞の受賞、おめでとうございます。ご自身は今回の《黒彩器-相-》受賞をどのように思っておられますか。

今回は、いままでやって来たことが総合的に良い結果となり、僕のなかでは完成度の高いでき映えだったかなと思っています。

一それは具体的にはどんなところなのでしょう。総体としてすごく良くできていると思うのですが、完成度が高いとおっしゃった、ご自身が一番満足しているところを教えてください。

いままで（制作してきたかたち）よりシンプルにはなったのですが、自分のかたち（への思い）が開口部にはっきり出せたこと、（つまり）見せたいところがはっきり出せたかな、と思っています。

一受賞作はボディのアウトラインが非常に伸びやかな印象です。結果としてシャープなアウトラインで魅せる口づくりができたということでしょうか。

いままでもそういう考え方でやっていたのですが、今回はある程度、こういう口…まあそこまでは考えてはいなかったのですが、シャープな口づくりというのが最初に頭のなかにあって、今回は逆に（口づくりから）フォルムができてきたなあ、という感じです。

一口のかたちのイメージがまずあって、つまり一番端っこの部分がイメージとしてできてきて、そこからそれにふさわしい容器としての器の形を追求したということなのですね。

ここに持っていくために下からつくっていくとか…、ここにどうもっていくかによってフォルムができてきたというか…、今回はそういう考え方を自分のなかで始めたんですね。

一一般的には素材の性質に寄り添って表現していくというか、自分の気持ち（を素材）とあわせていくプロセスで土を立ち上げていくような気がするのですが、そういうことを散々

やった結果として自分に理想的な口づくりっていうのが先にイメージされたということなのでしょう。

そうですね。前々作からこの方向で作品を作りはじめたのですが、そのときから今回のような口づくりのイメージが湧いて、そこに持っていくためにフォルムをどうしようか、という感じです。



一ところで、土はやっぱり萩の土なのでしょう。

いまは100%萩の大道土です。

一萩焼伝統の大道土は「さくい（粘性に乏しく、壊れやすい）」土なので、なかなかああいうシャープなかたちを作りにくいという人もいますが、渋谷さんの場合はどうなのでしょう。

材質的に磁器（土）の方が、ある程度の技術が備わればもっとシャープにできると思うのですが。これまでの僕の技術のなかでずっと使ってきたものが一番慣れているというか、いちど信楽（土）でもやってみたことはあるのですが（意外に）作りにくかったです。

一信楽土は、どういう点で作りにくかったのでしょうか。

技術的なことなのですが、作っているうちに垂れてくるというか…そういうイメージ。たぶん僕が技術的に信楽の土に慣れていないということもあるのだと思います。

一萩の土だったら大体どんなかたちでも思いどおりにできますか。

まだ、だめです。（笑）（萩の土は）性質的に何となくわかっているの、やっぱり使いやすい。

一大道土は単味ですか？

単味です。基本的に、これをいったらもっと精度を上げないといけないんですけど、土から導き出されるかたちみたいなのを（陶芸評論では）よく使われると思うのですが、そういうのはあまり好きではなくて。作品としてこういうふうに表示したいために（土の）性質をわかっていくみたいなの（方向です）。

一ところで、受賞作の黒と白のモノトーンについておたずねします。大道土に透明釉を掛けたら枇杷色がでるし、また焼き方によっては青磁っぽい色にもなるけど、これがそういう（釉調の）出し方じゃなくて、マット調で、黒白が完全に分かれたのではなく、中間色もあるツートーンにしたのは、どういう思いからなのでしょう。

かたちで魅せたい（という）、自分なりのスタイルを持ってやってきた結果（でしょう）。（これまで）そこに無彩色でかたちが前面に出る色、一回（ずつ）黒だけ白だけのもやってみたのですが、なかなかうまくいなくて。ボディ（のかたち）は白黒（ツートーン）にする前からできていたんです。でも、なかなか（かたちと）合う色がなくて（そのままにして）置いていたのですが、あるとき京都に行く機会があって、夜のお寺でライトアップされている場所に行ったときに、昼間に観る風景とは全然違う「静謐な美しさ」みたいなこと（を感じた経験）があって、それをどうにか自分なりに作品に取り入れてできないだろうかと考えました。下からライトアップされたかたちが、だんだん暗くなっていく姿を作品にしてみたら（自分なりに）すごくはまったんです。





一闇の中の明るい空間、暗部に明るい空間が広がっていくとか…、あるいは逆に底知れない闇を感じる、そういったことでしょうか。それに自分のかたちがマッチしたということ？

そうですね。色（について）は、長三賞（常滑陶芸展第30回記念大賞受賞）の頃（2011年）から、ずっと突きつめようとしてきました。この色合いで7～8年やってきていたので、このたび良い結果が得られたのだと思います。これが、また新しいことをやるきっかけになれば（さらに良い）と思います。

—新しい色に挑戦しようと思っているのですか。

かたち（について）は、僕ができることといえば、自分が持っている感覚以外（のかたちは）なかなか作れない。けど、いいか悪いかわからないですが、取りあえず色を変えてみると、またそれに合った新しいフォルムが出てくるのかなと思っています。逆か、どうかはわからないですけど…。

—それは、大道土を単味で使っていた素地土に、見島土を入れてみても変わってくるのではないのでしょうか。色がということであれば…。

そうですね、色を変えれば質感も変わってくるだろうし、そこから新しい一歩を進めていこうと思います。良い機会をいただいたので。

—そうしてそこから進めていったその先のことですが、渋谷さんの目指すところはどこでしょうか？

まだそんな先のことは考えていないのですが、次の作品でも自分が納得する作品ができたとき、その結果には何か大きいものがあるのではと思います。どうなりたいといっても、僕は一つ一つ結果を残していかないとそこに辿りつけません。もちろん漠然としたものはありますが…。いろんな先生方を見て、先生方もそこに行きつくまでに一つ一つ仕事をされていますし、僕もこの歳になって、また自分が昇華できる作品ができて評価していただいた（わけで）、そうしたことの積み重ねだと思っています。

—今日はお忙しいなか時間を割いてくださりありがとうございました。工房もじっくり見せていただきましたが、お話のとおり日々ストイックな環境で自分のかたちを追求されていることがよくわかりました。今後のご活躍を心からお祈り申し上げます。ありがとうございました。

（2016年11月16日、山口県萩市明木にある渋谷英一氏の工房にて）



渋谷英一の仕事について

渋谷英一は、萩焼づくりの基礎基本を経験豊富な祖父（渋谷泥詩氏）から教わった。しかしながら、伝統的な萩焼づくりでは掬いきれない複雑多様な現代人の感性を、どうか自分なりに突き抜けたかたちで表現できないものかとずっと模索してきたという。こうした作陶に対する真摯な意思と押さえがたい創作衝動とが入り交じった工房で、彼は萩焼伝統の素材と技術に向き合いながら自己を見つめてきた。

渋谷がそんな思いで採用した成形の技術は、萩焼づくりでは主流とされてこなかった粘土紐輪積み法だった。もちろん、ロクロを中心とした萩焼伝統の技術の練度に自ら及第点を与えたという訳ではなく、むしろ熟練だけでは容易に超えられない、技術的な高みを諒解したといったほうがよいだろう。そしてその高みは、造形行為の根底にあるポテンシャル（潜勢力）と密接な関係にあることも、同時に感得したのであろう。

以来、自己の制作目的により有効な技術を選別し、その選択

した技法を練り上げることに、作陶の重心を据え直した。おそらく、この制作姿勢の転換点で、自らの想像力の圏域そのものが、萩焼の伝承的規範の囲いを乗り越えて、拡張しつつあることに気付いたに違いない。

いま渋谷は、器が本来備えている「容れる」とか「注ぐ」といった働き（機能）を、同時代的感性のリアリティ（現実）と捉えて表現している。つまり、器の機能を造形要素に置き換えて、それを軸に想像力を拡張させ、一つのかたちを成そうとする方向性である。これはもちろん、器の機能を巡ってしばしば聞かれる、道具論的作品解釈とは対極にある造形思考で、機能を十全に満たすことで事足りるものではないし、また機能をまったく持たないオブジェを目指すものでもない。いわば、機能を有することと機能を失ったことのあわいに浮かび上がる、かたちの両義性を掬い取ろうとするものだ。

渋谷の仕事は、器とオブジェという現代陶芸の形式的境界をあえて攪乱する、じつにユニークな試みである。

石崎 泰之（当館学芸専門監）

現在形の陶芸

THE HAGI TAISHOU (GRAND PRIX) OF CONTEMPORARY CERAMICS IV

萩 大 賞 展 IV

2016 12.3^土 - 2017 1.29^日

山口県立萩美術館・浦上記念館 本館2階展示室

休館日 | 1月16日(月)
開館時間 | 9:00～17:00 (入場は16:30まで)

観覧料金 | 一般500(450)円、70歳以上の方・学生450(400)円

※()内は20名以上の団体料金。※18歳以下の方、および高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学する生徒は無料。
※身体障害者手帳、戦傷病者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をご提示の方とその介護者(1名)は無料。
※普通展示をご覧になる場合、別途観覧料が必要。

主催 | 現在形の陶芸萩大賞展Ⅳ実行委員会
(山口県立萩美術館・浦上記念館、萩市、萩市文化協会、萩陶芸家協会)

後援 | 朝日新聞社、共同通信社山口支局、産経新聞山口支局、時事通信社山口支局、中国新聞防長本社、西日本新聞社、日本経済新聞社山口支局、毎日新聞社山口支局、読売新聞西部本社、NHK山口放送局、KRY山口放送、fys FLE山口、萩ケーブルネットワーク、yab 山口朝日放送、エフエム萩、エフエム山口

助成 | 株式会社カワバラ・コーポレーション

現在形の陶芸

THE HAGI TAISHOU (GRAND PRIX) OF CONTEMPORARY CERAMICS IV
萩大賞展Ⅳ

今年で4回目となる陶芸の公募展「現在形の陶芸 萩大賞展Ⅳ」では、日本全国、また、国外も含め159名194作品の応募があり、2次にわたる厳正な審査の結果、114名126作品が入選しました。

当館では、入選した126点を2017年1月29日(日)まで展示しています。

※会場では、出品作品の制作者による「入選者の声」を作品とともに展示しています(お寄せくださった制作者のみ)。作品の造形と制作者の思いも感じることができます。

<p>萩大賞</p> 	<p>黒彩器 -相-</p> <p>渋谷 英一 (山口県)</p>	<p>岩国美術館賞</p> 	<p>落華 -白-</p> <p>田中 陽子 (石川県)</p>
--	---------------------------------------	--	--------------------------------------

<p>優秀賞</p> 	<p>うつろう</p> <p>神田 和弘 (鹿児島県)</p>		<p>Symbiosis</p> <p>田尾 晃 (滋賀県)</p>		<p>志野茶碗</p> <p>林 友加 (岐阜県)</p>
---	-------------------------------------	--	--	--	-----------------------------------

<p>審査員特別賞</p> 	<p>夏雲光日 生きる</p> <p>宇高 輝彦 (大阪府)</p>		<p>白妙彩磁壺</p> <p>庄村 久喜 (佐賀県)</p>		<p>soliloquy</p> <p>玄 尚哲 (滋賀県)</p>
---	--	---	-------------------------------------	--	--

<p>佳作</p> 	<p>灰袖彩鉢</p> <p>市野 秀作 (兵庫県)</p>		<p>サシクワカヒメ 大石 早矢香 (大阪府)</p>		<p>陶更紗</p> <p>正親 里紗 (静岡県)</p>		<p>月下</p> <p>加藤 真美 (愛知県)</p>		<p>Tempidhora 栗原 裕子 (東京都)</p>		<p>透光磁練込-hiwalani-</p> <p>佐藤 美佳 (神奈川県)</p>		<p>玄・赫 高垣 篤 (千葉県)</p>
	<p>布目彩色花器</p> <p>武田 敏彦 (栃木県)</p>		<p>Shigaraki time 2016-portrait 中田 ナオト (東京都)</p>		<p>Titan feet 中原 幸治 (大阪府)</p>		<p>内観のみ 橋本 知成 (石川県)</p>		<p>白泥器</p> <p>村尾 一哉 (香川県)</p>		<p>色絵銀彩青晶玉鉢</p> <p>渡辺 国夫 (山梨県)</p>		

とよはらくにちか 豊原国周の役者絵

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成29年(2017) 1月31日[火]~3月5日[日]

豊原国周(1835~1900)は、明治期に活躍した浮世絵師で、小林清親、月岡芳年とともに最後の浮世絵師と賞されます。文明開化による急速な社会変動に伴い、浮世絵も新時代の趣向に対応してゆくなか、江戸っ子気質の国周は、最後まで伝統的な浮世絵様式を描き続けます。特に画面いっぱいに描かれた、迫力ある役者大首絵は、圧倒的な人気を博しました。その写実的な表現から、国周はのちに「明治の写楽」と評されています。今回は初期から晩年までの役者絵を紹介いたします。



(左)「明治座新狂言 萬機様血染御書 大川友右衛門 市川左團次」
大判錦絵三枚続 明治32年(1899)
(右)「桃山御殿の場 加藤清正 河原崎権之助」大判錦絵 明治6年(1873)

春景色

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成29年(2017) 3月18日[土]~4月23日[日]

江戸の人々は四季を通じて神社・仏閣への参詣、名所見物などの物見遊山に出かけ、それらは暮らしのなかの楽しみとして定着していました。草木が芽を出し、さまざまな花が咲く春は、旧暦では一・二・三月にあたります。この季節には、梅や桜といった花の名所が人々で賑わい、浮世絵にも江戸や諸国の春景色、春の花を取り合せた美人画などが描かれました。今回は歌川広重の作品を中心に、浮世絵に描かれた春を紹介します。



歌川広重 「東海道五十三次之内 鞠子 名物茶店」
横大判錦絵 天保4~5年(1833~1834)

江戸の神仏と信仰

新しい一年がはじまりました。初参りで神様、仏様をお願いをした方もおられることと思います。人の願いごとは抽象的なものもあれば、現世利益を求めるものもあり、実にさまざまです。現代に生きる私たちは、便利なことにインターネットを駆使して〈金運 神社〉とか〈恋愛 パワースポット〉とかいった具合に言葉を入力・検索すれば、お願いごとと各種の成就に適した社寺や、そのほかの霊験あらたかな場所について容易に知ることが出来ます。

江戸時代、とくに木版印刷の技術が発達した後期には、このような役割を版本や浮世絵版画などが果たしていたと言えます。たとえば、文化11年(1814)には万寿亭正二著『願懸重宝記』という実用書が出されています。江戸と近郊の霊験地を紹介し、各地のご利益、願かけとお礼参りのハウツーがまとめられた一冊です。ちなみにご利益は、頭痛・薄毛、虫歯、咳、痔の平癒、子どもが月代を剃る時に騒がないようになる、蛇除け、盗賊除けなど。当時の人々がどのようなことを願っていたのかが知れるとともに、現世利益が重視されていたことを教えてくれます。本の末尾には続編の発売予告も載り、その人気ぶりがうかがえます。浮世絵では名所絵として社寺などが描かれたほか、参拝する女性たちの姿も多く描かれました(図1)。このような版本や浮世絵が神仏や信仰についての情報を人々に提供し、興味をかきたてました。

この『願懸重宝記』は江戸と近郊の霊験地に特化したものですが、江戸の人々が出向いたのは近場だけにとどまりませんでした。その理由は、同じ時期に交通網が整備され、経済面にもゆとりができ、庶民の旅が以前よりも身近になったことに負うところが大きく、人々は路銀を工面し、関所を越えるのに必要な往来手形を携えて、信仰の旅へと出発しました(図2)。

また、信仰は霊験地への参拝に限ったことではありません。今でも見られる神棚は、信仰が住まいに取り入れられた例のひとつです。図3の吉原妓楼には、家内安全、商売繁盛を願って祀られた神棚が描かれ、そこには御神酒徳利、獅子、折鶴、括り猿など縁起の良いものが納められています。七夕の頃には、家々の軒端に飾りつけられた笹の葉が空を賑やかにしました(図4)。さらに、江戸時代独特の軽妙な感性が、神仏や信仰をテーマに新しい表現を生み出すこともありました。鬼の念仏、瓢箪鯉など仏の教えを滑稽味あふれる表現で描いた大津絵(図5)や、鯉を地震の元凶と考える俗信がもととなった鯉絵などがその例として挙げられます。



図1



図2



図3



(図3 部分)

さて、神仏や信仰は、お呪いなどの行為にも及んでいます。図6に描かれている可愛らしい少女は、何やらお呪いのため手首に紙縋りを結んでいるようです。背景に書き込まれた文章を読んでみましょう。

種々さまざまのそらまじない 人のおしゆる毎に正直にうけては 日にまし神いぢりがつる物なり 是人妖とて禍を
まねくことさとくするべし 神仏はたふとみ遠さけて ちかづきけがし奉るものにあらず うらかたみくじ物いまいに
こゝろをつくすも しゆしやうにてかはゆらしくは見ゆれども 是もまたやまいなり つゝしむべし もし気にかゝる事
あらば鶴亀松竹とはらい まぢないはちはやふる卯月八日くらの事にておくべし

(現代語訳)

種々さまざまな根拠のない呪いを、他人が教えてくるたびに正直に受けては、神様をもて遊んでいる状態が日増しにひどくなっていくようなものです。このような状態は、妖であって、禍を招くのだと気付くべきです。神様仏様には尊敬の念を持って距離をおき、近付いて汚すものではないのです。占いやおみくじ、物忌に心を尽すのも、けなげでいたわしく見えるけれど、これもまた病なのです。慎みなさい。もし気にかかる事があれば「鶴亀松竹」と言って払いのけて、呪いは四月八日の灌仏会の際に行うくらいにしておきなさい。

さまざまなかたちで信仰が存在した江戸時代、これらの力は現代以上に人々の心の安定剤となったことでしょう。しかし、お呪いや占いやなどをして神様仏様の力を頼みにしてばかりでは、かえってよくないのだと厳しく戒められています。いつの時代もやり過ぎは良くないようですね。

(淵田恵子/当館学芸課専門学芸員)



図4



図5



図6

図1 歌川国貞 「三めくりの夕立」 大判錦絵3枚続 天保期(1830~1844)
図3 葛飾北斎 「吉原妓楼の図」 大判錦絵5枚続 文化8~10年(1811~1813)
図5 歌川国芳 「浮世又平名画奇特」 大判錦絵2枚続 嘉永6年(1853)

図2 葛飾北斎 「富嶽三十六景 諸人登山」 横大判錦絵 天保2~5年(1831~1834)
図4 歌川広重 「名所江戸百景 市中繁栄七夕祭」 大判錦絵 安政4年(1857)
図6 喜多川歌麿 「教訓親の目鑑 正直者」 大判錦絵 享和2年(1802)頃

江戸の神仏と信仰

普通展示(浮世絵)

会期 ▶ 平成29年(2017) 1月2日[月]~1月29日[日]

茶陶の近現代

普通展示(陶芸2)

会期 ▶ 平成29年(2017) 1月17日[火]～7月2日[日]

個性のリアル(現実)を見つめて自由な想念をめぐらし、優れた手技でそれを一つのかたちに統合して表現する能力。これを芸術的創造と呼ぶならば、道具としての制約がきわめて多い茶陶の制作でこれを実践し、一つの作風に練り上げるのは簡単なことではありません。茶事の制約一切から解放された造形は、いかに斬新的で豊かな芸術性が感じられようが、茶陶としては紛い物でしかないからです。一方、いくら卓越した技術をもってしても、過去のスタンダード(規範)にとらわれた茶陶は、写し(模倣)の域を脱しない紋切り型の造形となってしまう、芸術性はおろか同時代の生きた表現としての魅力すら失われてしまいます。

近代以降の陶芸家は、個性が生み出す自由な表現力を茶陶にどのように発揮するか、このことに意を尽くしてきました。今回は、茶の湯の芸術としての内容性を重視して、個性のリアル(現実)を茶道具の造形へ昇華させていった近現代作家たちの茶陶を紹介します。



三輪壽雲(十一代休雲)《鬼萩花冠高台茶碗 銘 命の開花》2003年 当館蔵(染野義信氏・啓子氏御遺族寄贈)

朝鮮半島のやきもの —古陶磁と現代陶芸

普通展示(東洋陶磁)

会期 ▶ 平成29年(2017) 1月31日[火]～5月28日[日]

古くからやきものの技術を発展させてきた朝鮮半島、今回はその中から高麗時代(918～1392)、朝鮮時代(1392～1910)の古陶磁と、大韓民国(1948～)の現代陶芸について紹介します。

高麗時代は中国越州窯の影響を受け高麗青磁が誕生する、朝鮮半島のやきものの画期と言えるでしょう。その初源は9世紀前半から10世紀後半まで諸説あり、未だ定説には至っていませんが、器面を彫刻し白黒の土を埋め込んだ象嵌青磁の美しさには目を見張るものがあります。14世紀末には粉青沙器(「粉粧灰青沙器」の略称)と呼ばれる灰青色のやきものが作られ、象嵌、搔落し、刷毛目、線彫りなどの技法を用いた多様な作品を生み出しました。

続く朝鮮時代には、白磁が青磁に代わって朝鮮半島のやきものの主軸となりました。15世紀になると白磁の胎土上に青い絵付けを施した青花が作られ、朝鮮時代を通して生産が続けられました。

日本の統治時代を経て大韓民国が成立するとアメリカ留学が盛んになり、伝統的なやきもの文化とは異なった新たな展開、実用性を排したオブジェ陶制作が陶芸表現の主流となり、現在に至ります。

今も成長し続ける朝鮮半島のやきもの。その魅力の一端を感じていただければ幸いです。



Seok Chungwon 《Self-portrait》2013年 当館蔵

田中信行の茶室 流れる水 ふれる水

2017年4月8日(土)～2018年3月25日(日)

呈茶席 2017年4月8日(土)、2018年3月25日(日)

田中信行《流れる水 ふれる水》(部分) 2015年

平成28年度の新収蔵資料について

本年度の資料収集活動(資料の購入・受贈)として、明治の浮世絵師井上安治の作品を1件購入したほか、下表のとおり版画、油彩画、水彩画など14件と、古陶磁と現代陶芸を50件、インスタレーション1件の、あわせて65件を受贈いたしました。ご寄贈いただきました皆様をはじめ、お世話になりました関係各位に心よりお礼申し上げます。

購入資料一覧

番号	作者	作品名	制作年	寸法(cm) / 形態・判形
1	井上安治	東京真画名所図解 本所御藏橋、江戸橋之景、本所枕橋ツメ、本所御藏橋、新富座、浅草蔵前通、新富座	明治17～22年(1884～1889)	四つ切判錦絵



1. 井上安治 《東京真画名所図解 赤坂紀伊国坂、江戸橋之景、本所枕橋ツメ、本所御藏橋、新富座、浅草蔵前通》 明治17～22年(1884～1889) 四つ切判錦絵

寄贈資料一覧

番号	作者	作品名	制作年	寸法(cm) / 形態・判形
2	楊洲周延	時代かがみ 明治 憲法発布	明治30年(1897)	大判錦絵
3	立原位貫	歌撰恋之部 物思恋 / 喜多川歌麿 (復刻、多色摺木版画)	1978年	39.7×27.4
4	立原位貫	源頼光公館土蜘蛛妖怪図 / 歌川国芳(復刻、多色摺木版画)	1981年	(左)38.2×27.0 (中)38.0×26.3 (右)38.0×26.4
5	立原位貫	歌撰恋之部 深く忍恋 / 喜多川歌麿 (復刻、多色摺木版画)	1981年	39.2×26.4
6	立原位貫	装丁本「かぶき夢幻 / 郡司正勝」装剣奇賞(復刻、多色摺木版画)	1983年	21.9×16.7×3.2
7	立原位貫	青楼美人六家選 松葉屋粧ひ(復刻、多色摺木版画)	1984年	39.2×26.3
8	アダチ版画研究所	当世遊里美人合 / 鳥居清長(復刻、多色摺木版画)	不詳	39.4×26.7
9	小田まゆみ	花よりだんご(エッチング)	不詳	15.6×9.9
10	J.フリードランド	無題(リトグラフ)	不詳	42.2×52.0
11	シャガール	無題(エッチング)	不詳	20.9×27.6
12	三岸節子	花(油彩画)	不詳	27.4×33.5
13	三岸節子	無題(水彩画)	不詳	24.5×32.4
14	村上肥出夫	すずらん(油彩画)	不詳	26.6×20.7
15	村上肥出夫	1971.清水(水彩画)	1971年	43.5×30.2
16	不詳	染付菊弁文猪口	18世紀後半(江戸)	口径8.2
17	不詳	染付鉄線文猪口	18世紀後半(江戸)	口径6.7
18	不詳	染付樹下人物文猪口	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径7.2
19	不詳	染付蜻蛉草文猪口	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径8.2
20	不詳	色絵蝶花卉文杯	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径4.8
21	不詳	色絵蝶花卉文杯	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径5.1
22	不詳	染付竹筵文猪口	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径8.0
23	不詳	染付唐子遊び文杯	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径5.3
24	不詳	染付草文猪口	18世紀末～19世紀初(江戸)	口径6.8
25	不詳	染付花文角皿	19世紀前半(江戸)	口径26.4×31.0
26	不詳	染付岩上鷹文皿	19世紀前半(江戸)	口径30.9
27	不詳	染付山水人物文角皿	19世紀前半(江戸)	口径31.5×38.0
28	不詳	染付四割花文に交差文市松湯呑	19世紀前半(江戸)	口径7.4
29	不詳	染付騎馬人物文棧花皿	19世紀前半(江戸)	口径25.3
30	不詳	染付松竹梅文長方皿	19世紀前半(江戸)	口径20.8
31	不詳	染付竹虎文皿	19世紀前半(江戸)	口径29.3
32	不詳	色絵縹文猪口	19世紀後半(明治)	口径6.9
33	不詳	色絵人物文杯	19世紀後半(明治)	口径5.0
34	不詳	色絵人物文杯	19世紀後半(明治)	口径5.0
35	不詳	色絵蓮弁唐草文猪口	19世紀後半(明治)	口径6.3
36	不詳	色絵蓮弁唐草文猪口	19世紀後半(明治)	口径6.3
37	十代三輪休雲	蘇香炉	1960年頃	蓋付高15.1
38	十二代三輪休雲	初声	1964年	高さ12.1
39	十二代三輪休雲	青磁輪裏紅愛文花瓶	1964年	高さ13.4
40	十二代三輪休雲	青磁輪裏紅愛文水注	1964年	高さ19.7
41	十二代三輪休雲	青磁輪裏紅愛文花瓶	1964年	高さ20.5
42	十二代三輪休雲	青磁輪裏紅愛文花瓶	1964年	高さ20.6
43	十二代三輪休雲	青磁輪裏紅文花瓶	1964年	高さ13.5
44	十二代三輪休雲	鶴首	1964年	高さ38.2
45	十二代三輪休雲	赤絵愛文壺	1965年	高さ13.7
46	十二代三輪休雲	赤絵愛文壺	1965年	高さ14.0
47	十二代三輪休雲	赤絵愛文瓶	1965年	高さ26.0
48	十二代三輪休雲	赤絵愛文瓶	1965年	高さ29.2
49	十二代三輪休雲	赤絵愛文瓶	1965年	高さ24.2
50	十二代三輪休雲	赤絵愛文面取瓶	1965年	高さ23.5
51	十二代三輪休雲	赤絵花草文瓶	1965年	高さ34.4
52	十二代三輪休雲	赤絵花草文瓶	1965年	高さ29.0
53	Vaea Marx	(Work)	1970年	高さ77.0
54	杉江淳平	記憶・構	1976年	高さ125.0
55	波多野善蔵	萩窓八角深鉢	1979年	口径40.0
56	波多野善蔵	萩窓抜口壺	1980年	高さ31.8
57	波多野善蔵	萩火色広口花入	1981年	高さ32.4
58	波多野善蔵	萩火色深鉢	1982年	口径35.0
59	波多野善蔵	萩窓抜口壺	1982年	高さ32.0
60	波多野善蔵	萩火色大壺	1984年	高さ34.8
61	波多野善蔵	萩火色壺	1984年	高さ32.2
62	波多野善蔵	萩窓抜口壺	1980年	高さ39.6
63	木村芳郎	猛虎	2008年	高さ146.0
64	岡田泰	淡青輪皿	2009年	口径53.0
65	坂幹	萩観音像	不詳(昭和カ)	高さ13.4
66	小高良作	偶然が縁となり宇宙になる -Coincidence-(一部)	2013年	①44.0×26.5×9.0 ②43.0×28.5×8.0 ③41.0×25.5×8.5

